

第9回息子の看取り経験から健康問題まで～ろう者の視点にたった医療～

宮谷真紀子 (薬剤師)

聴覚障害には様々な原因があり、様々な聴力があることは意外に知られていません。全く聞こえない方、突然失聴した方、低い音が聞こえにくい方、音は聞こえても言葉として認識ができない方、片方が聞こえにくい方等本当に様々で同じ聴力の方はいません。聞こえることを前提にした社会でどのように動くか私自身もこれまで考えておりました。

石野さんをはじめ多くの聴覚障害の方々の様々な取り組みが今の社会につながっていると思います。

電話はろう者だけでなく、難聴者も難しい人は大勢います。

私自身問い合わせにメールアドレスがなく、電話番号だけの時、他の方に頼まなければならないことがあります。

特にどうしても本人確認が必要と言われてしまうと困る場面も多いです。

今はアプリや遠隔通訳サービスも充実してきており、社会全体で機器の開発は進んできており、石野様の情報アクセシビリティフォーラムでも多くの技術者が様々な機器を展示していました。

ただ、どんなに素晴らしい機器でも、例えば緊急の通報のアプリを開発しても消防庁が導入しなければ都内の人は使えないという状況です。

何か起きてからでないと社会が動かないという状況はすごく危険な社会にも感じます。

インターネットが普及した現在でも情報収集に苦勞することはあり、インターネットのない時代に石野さんが情報収集することは本当に大変だったと思います。

また、医療機関では体調が悪い上にご自身の障害が受診する際に大きな壁になることもあります。

便利な機器が増えてきているにも関わらず、聴覚障害者が困る場所として病院が常に上位である状況は変わっていません。

石野さんもおっしゃっていましたが、昔、診察時に通訳者を追い出す、マスクをとらないことがあったという状況があったそうですが、今でも『マスクを外して口の動きを見せる必要がある』ことをご存知ない方は大勢いらっしゃいます。

私自身、病院で医療者対象に難聴アンケートを実施したところ、感染症は例外として、医療者が理解してくれないのではなく、本当に知らないだけだということが分かりました。

認識の違いが聴覚障害者とのコミュニケーション問題を引き起こし、医療ミスにつながる可能性も明らかになりました。

今回の講義も活かし、医療者として難聴者として聴覚障害の方が受診しやすい環境に今後も取り組んでまいりたいと思います。